

# 魔法のプロジェクト2021 活動報告書

報告者氏名: 田中 勤子 所属: 広島市立己斐上中学校 記録日: 令和4年 2月 10日

キーワード: 不安・怒りへの対応 自己肯定感 学習への抵抗感の軽減

## 【対象生徒の情報】

○学年 中学校2年

○困難の内容

- ・自己肯定感が低く、不安が強い。
- ・怒りのコントロールが難しく他害行為が見られる。
- ・自信のない活動や内容から逃げようとして学習に向かいづらい。

○使用した機器

Pad iPhone watch chromebook AI スピーカー Pepper

## 【活動目的】

○当初のねらい

- (1) 対象生徒が抱える不安に対する自己理解を高め、それに対する対処法を見つけ実行することができる。
- (2) 自分流の学習の仕方を身につけ、学習への抵抗感を軽減する。
- (3) 得意なことを活かし、達成感を得る経験を重ね自己肯定感を高める。

○実施期間 令和3年4月～令和4年2月

○実施者 田中 勤子 (吉村 佳子 依田 祥吾)

○実施者と対象生徒の関係

田中 勤子 (専任特別支援教育コーディネーター)

吉村 佳子 (特別支援学級担任)

依田 祥吾 (特別支援学級担任)

## 【活動内容と対象生徒の変化】

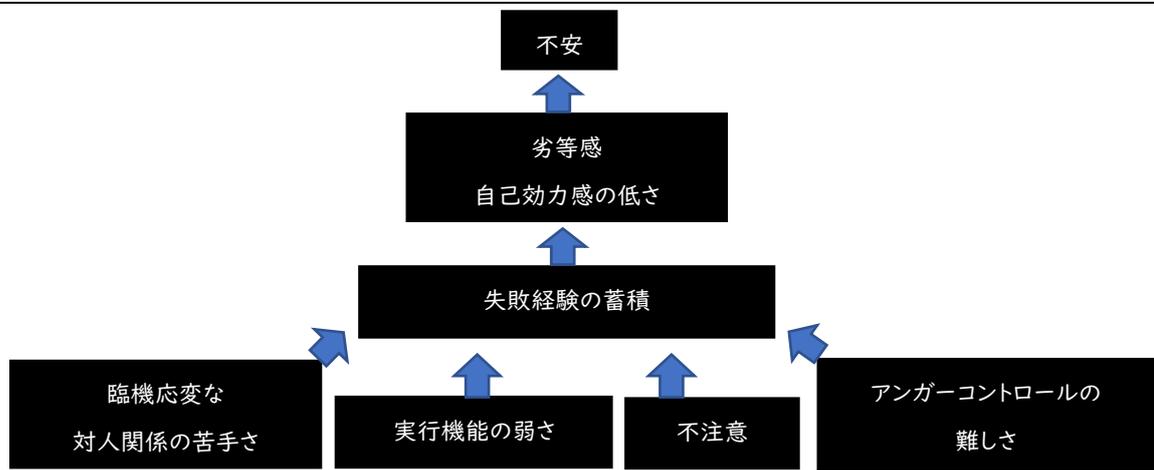
○対象生徒の事前の状況

(学習について)

- ・書くことに苦手意識を持ち、板書を写すのを嫌がる。書く量が増えると、書きたくない気持ちが膨らむ。綺麗に書きたいが自分が満足するように書けないことも書きたくない理由に挙げている。画数の多い漢字を書くのも嫌がる。
- ・「読み」については、小学校高学年の漢字の読みを誤ることはあるが、すらすらと読むことができる。興味のある内容であれば、文章を読むことが苦にならない様子である。
- ・数学には苦手意識を持つ。問題を解く前に、文字式を正確にノートに書くところで疲れてしまっている様子が見られる。また、複雑な思考を必要とする問題では「頭の中がごちゃごちゃする」と言う。
- ・答えを見てノートやワークに写すことが学習スタイルになっており、じっくりと考えて自分で問題を解いた経験が乏しい。
- ・自信がないことから逃げたいという気持ちが強い。しかし、それと同じくらいやらなければならないと言う気持ちも強く、葛藤している場面も見られる。

(情緒面について)

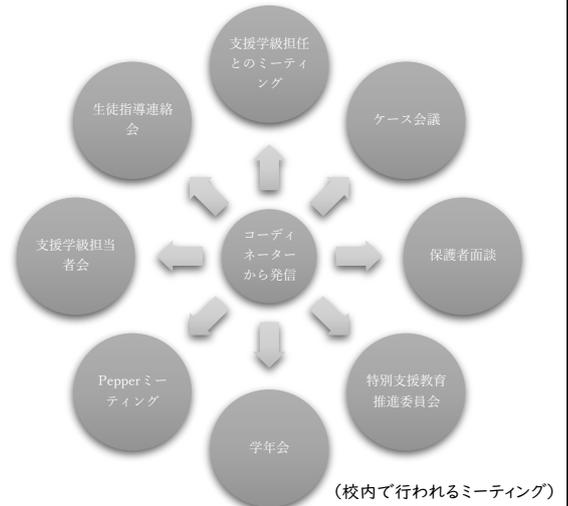
- ・家族に不安やイライラをぶつけ、暴言や暴力に至ることがある。
- ・授業中、心配なことや気になることがあると不安定になり、学習に向かえないことがある。
- ・登校前にネガティブな気持ちが膨らみ、なかなか家を出られない日がある。
- ・交流授業や学校行事等、集団活動に参加する前には不安が高まり、参加が難しい時がある。



○活動の具体的内容

今年度の取り組みとして、対象生徒を学校全体で理解し、その「困り」の要因を把握しながら、適切な指導と必要な支援を行ってきた。対象生徒の「困り」の一番の原因と考えられる「不安の要因」について、複数のミーティングにより色々な角度から情報交換と分析を行い、指導と支援の方向を検討していった。

そして、核となるキーパーソンを中心に、人的な環境整備を行い、対象生徒が過ごしやすい環境をつくるとともに、本人の集団生活への適応や学習に必要なスキルの向上や代替手段の獲得を目指した。



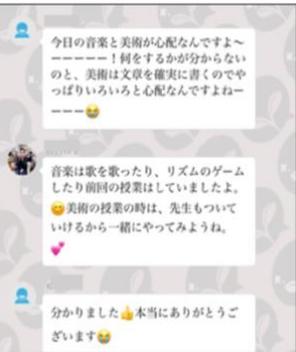
(校内で行われるミーティング)

|            |            |                                |  |
|------------|------------|--------------------------------|--|
| 不安に対して     | 不安を伝える     | 不安な気持ちをメールで伝える                 |  |
|            | 思考を整理する    | 心の中の不安を言葉で書き出す                 |  |
|            | 見通しを持つ     | スケジュールの確認と即時評価を行う              |  |
| 学習への抵抗感を軽減 | 書きの苦手さに対して | 板書やプリントを取り込みキーボードで書き込む         |  |
|            | 情報の集約      | プリントや板書など必要な情報を写真に撮り一箇所に保存する   |  |
|            | 定期テストの前に   | ・課題をリスト化して把握する<br>・アプリを使って暗記する |  |
|            | 家庭学習へのサポート | 家庭での学習に取りかかるタイミングをつかむ          |  |

|           |          |                         |   |
|-----------|----------|-------------------------|---|
| 自己肯定感を高める | 自尊感情を高める | 校内インフォメーションのプログラムを作成する  |  |
|           | 自己有用感を持つ | 就労体験（起業体験）資料を作ってプレゼンを行う |  |

○対象生徒の事後の変化

(1) 不安に対する自己理解を高め、それに対しての対処法を見つけ実行する。

|  |  |  |
|--|--|--|
| <p>①登校前の不安な気持ちを伝える</p>  | <p>毎朝、安心感がリセットされ不安でいっぱいになり、なかなかスムーズに登校できない対象生徒に対して、「DropStep+ByTalk」を使い、朝の不安な気持ちを教員にメールで伝えられるようにした。自分の気持ちを言語化して伝えることで、何が自分の不安材料なのかを自分で分析することができるようになった。また、言語化された不安に対して、それを解消するように返事を返すことで、家で荒れることなく学校に向かうことができたようになった。</p> |   |
| <p>②見通しを持つ</p>        | <p>宿題や家庭でやるべきことの優先順位を明確にし、「DropStep」にリストを作り、対象生徒が家庭で確認できるようにした。自分一人でプランニングし実行に移すことが苦手な対象生徒にとって、それが取りかかりのきっかけとなり、実行を促すことにつながった。また、終わったことを担任の先生に知らせ、取り組めたことに対する肯定的な評価がなされたことも意欲につながった。</p>                                   |  |
| <p>③学年生徒への啓発学習</p>   | <p>学年生徒への啓発学習を4月初めと5月の終わりに実施し、認知特性の違いや合理的配慮についての理解を促した。対象生徒が憧れる同級生（キーパーソンとなる野球部の生徒）を中心に、彼への対応が優しく変化し、また、対象生徒も周囲の生徒の言動に刺激されてすぐにキレることがなくなった。対象生徒は「〇〇が優しくしてくれる。自分のことをわかってくれる」と話す。周囲への警戒心も少しずつ払拭されてきた。</p>                     |  |

上記の取組を行った結果、7月まで情緒的に大変落ち着いた様子が見られ、登校時間も安定した。しかし、9月以降、不安の膨らみや学習の継続の難しさなどから、対象生徒のモチベーションが下がり、朝、なかなか家を出られない日が現れ始めた。そして、やるべきことに向かえない気持ちは同時に自己嫌悪にも繋がり、イライラした気持ちを家族にぶつけ始めた。自己の不安に対する理解とともに、怒りの気持ちへの理解と、そのコントロールについてのアプローチも行う必要があると感じた。対象生徒が「荒れてしまった自分」を経験するのではなく、「荒れずに解決できた」快い経験を増やしていけるようにと考えた。

そこで、前述の目標に加えて、「怒りの感情に対する自己理解を促し、荒れずに解決することができる」を目標に置き、次の取組を行った。

①伝えたい気持ちをメールで送る



家族に聞いてもらいたいことを、直接話すのではなく、メールで伝えるようにしようとした。音声入力で、文字化して伝えるようにし、入力するあいだに、その「間」が衝動を抑えるように作用するのではないかと考えた。



「気持ちを伝えるという行為」を無くすのではなく、上手に伝えられるように、一呼吸、間を置いてメールで伝えるようにすることで、「怒り」がトーンダウンしていき、家族に衝動的に怒りをぶつけることが減っていった。

②マイナスなイメージを取り除く



10月以降、朝になると、マイナスのイメージが先行してしまい、登校時間が遅くなる日が出てきた。毎朝リセットされてしまう安心感を思い出すために、スカイプで繋いで、教室の様子や先生、仲間の顔を見せながら会話をした。

映像で担任の穏やかな表情や声に触れることで、自分を受け入れてもらえるという安心感を即時に感じることができ、マイナスなイメージを払拭することができた。また、スカイプでのやり取りが家を出発するタイミングになった日もあった。



③対面で言えない気持ちをビデオレターで伝える



野球部顧問は、対象生徒にとって、絶対的な存在で、言われることには逆らえないと思っている。しかし、言われたことに対する自分の言い分も聞いてほしいが、顧問の反応が怖くて伝えられず、家に持ち帰って家族の前で荒れてしまっていた。

そこで、納得できずモヤモヤした気持ちを、家に持ち帰る前にカメラに向かって話し、動画にして顧問に伝えるようにした。

ビデオレターで、自分の思いを伝えることができるようになり、顧問の指導後の荒れが見られなくなった。



④自分の気持ちを分析し客観視する

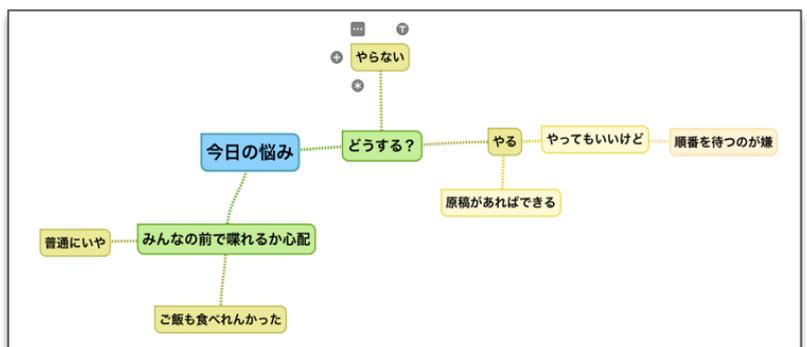


気持ちが不安定になった時、コーディネーターを訪ねて来れるようになった。一緒にマインドマップに今の気持ちを書き出していった。

右図は、総合的な学習の時間に行った高校調べの発表会の前に不安定になった時に

「SimpleMind」を使って、自分の気持ちを書き出したものである。「みんなの前で喋れるか心配なんです」「みんなの前で話すのはふつうに嫌なんだ」と、自分の気持ちを書き込みながら、

どうしてそうなのかを自分で分析し話すことができた。そうする中で、自分の本当の思いに気づき、その思いを実現するための解決方法を指導者と一緒に考え実行していくことにつながっていった。



(2) 自分流の学習の仕方を身につけ、学習への抵抗感を軽減する。

①書くことへの苦手さの軽減



「GoodNotes」に各教科のノートを作り、配布されたプリントをそこに取り込み、キーボードで書き込みをした。昨年までは、学習に苦手意識を持ち、その入口のところ(取りかかり)で、学習活動に入れず引き返してしまうことが頻繁に見られていたが、授業が始まる前に iPad と物理キーボードを準備し、授業に臨む姿が見られるようになった。

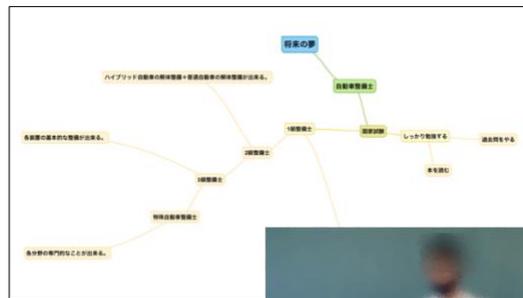
日によってはモチベーションが高く、プリントに手書きできる日もあり、どうやってプリントに記入するかを自分で選びながら行っていた。同じことを繰り返し行うことが苦手な生徒なので、その日の自分の調子に合わせて、学習方法を選ぶことも大切なのだと感じた。



②文章を書く



文章を書くことに苦手意識を持つ対象生徒であるが、マインドマップを使い、言葉から言葉を引き出しながら、表現を広げていくことができ、それを繋ぎながら文章にしていって。右上の図は交流学級の終学活で行われた1分間スピーチの原稿を考える際に作ったマインドマップである。それをもとに原稿を書き、堂々と交流学級でスピーチすることができた。

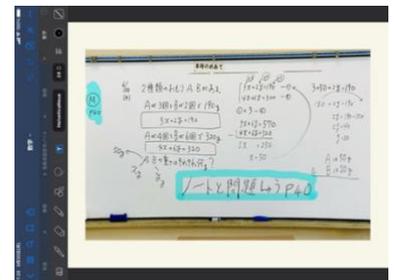


③情報の集約



板書やプリントなどの学習情報を写真に撮り、メモを加えたりしながら、「GoodNotes」の各教科のノートに保存し始めた。参加するのを悩む交流授業にも「とりあえず行って黒板の写真撮ってくる」と、自分で決断して交流授業の教室に向かうことができるようになってきた。

交流授業への参加が難しい同じ支援学級の仲間のために、板書の写真をプリントアウトして渡すこともあり、自分の情報がみんなの役に立っていることで自己有用感を感じているようだった。



④暗記を助ける



「AC Flip」「単語帳」「BitsBoard」を使って、重要語句の暗記を行った。中でも「AC Flip」をよく使っていた。冬休み明けには、自分の iPad を見せ、後期末テストの準備を始めていることを教えてくれた。

右図は対象生徒の「AC Flip」の画面である。冬休みの間に社会のノート整理を行い、整理して貼ったプリントを写真に撮り iPad に保存し、それに付箋を貼って覚えようとしていた。



⑤定期テストの前に



定期テストの前には、担任と一緒にテスト範囲を見ながら、課題のリスト化と試験勉強のスケジュール(週毎・日毎)を決めた。前期の定期テストでは、まだ一人で計画に沿って学習を進めていく自信が持てず、「Zoom」で繋いで家庭でのテスト勉強を手伝って欲しいと要求してきた。



放課後学習会に参加したり、「Zoom」で家庭と学校とを繋いだりしながらテスト勉強に取り組んだ。担任と一緒にワークを解いたり、「BitsBoard」を画面共有し、担任がエピソードを加えながら、一緒に原子記号の暗記を行なった。

後期になると、「Zoom」で繋いで学習したいという要求をしなくなったが、担任と一緒に課題のリスト化と試験勉強のスケジュールの組み立てを行い、自分で学習を進めることができた。前期に「Zoom」で繋いで一緒に行っていた学習方法で、後期は家庭で家族と一緒に行うことができた。

(3)得意なことを活かし、達成感を得る経験を重ね自己肯定感を高める。

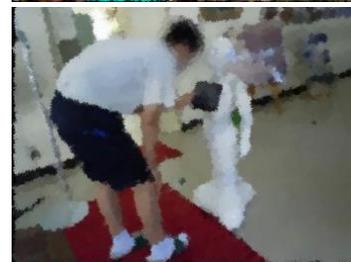
①校内インフォメーションプログラムの作成



学校長から依頼を受け、Pepper のプログラミングを行なった。今年度は Pepper に学校内のインフォメーションの係を担ってもらっている。校長室で、Pepper ミーティングを行い、学校長からのオーダーに答えながら、一緒に Pepper のセリフや動きを考えプログラムした。

対象生徒は自分の仕事として受け止め、進捗や次の仕事の依頼を気にする様子も見られた。

来訪者のお迎えも Pepper が行えるよう、その都度、学校長と一緒に来訪者に合わせた歓迎の言葉を考えプログラムした。来訪者に大変喜んでもらったことが、対象生徒の達成感や自信につながった。



②就労体験の実施

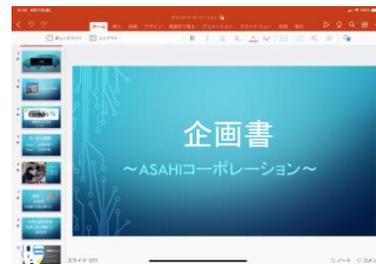


今年度はコロナ禍で職場体験も実施できず、また、毎年行っていた支援学級主催の食堂バザーも実施できないため、それに代わる就労体験を学校内で行うことを企画した。

職員を対象にして、生徒がそれぞれ自分の得意なことを活かして起業しようと投げかけると、対象生徒は、「おれは洗車で儲けるわ」と即決し、「ASAHI モーターズ」の起業企画を練っていった。

学校長に許可をもらうため、「PowerPoint」を使ってプレゼン資料を作成し、校長室に交渉に行き起業の許可を得た。

その後、残念ながらコロナウイルス感染拡大のため、思うように活動できず、未だ実際に営業することができていないが、「車のことはおれに任せてください」と、「ASAHI モーターズ」の営業トークは続いている。



③特別支援学校との居住地交流会の進行



特別支援学校との居住地交流会が行われ、対象生徒は進行係を務めた。久しぶりに会う同級生を喜ばせようと、交流会の司会はペッパーを使うことに決まった。対象生徒は前日までにそのプログラミングを行い、当日はペッパーを動かしながら会を進行した。当日は意気揚々と早朝から登校し、張り切って準備を行う姿が見られた。



後日、交流した友達から手紙が届いた。オンラインということで機器の接続等にも活躍する対象生徒の様子を見て、「自己紹介をした時に〇〇くんとは気づかずびっくりしました」「教室にペッパーがいてとてもびっくりしました」というコメントが書かれており、対象生徒は大変満足そうだった。

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

- (1) 登校時間が安定する。
- (2) 自分流の学習方法を見つけ始めている。
- (3) 荒れずに解決できるように自分から行動し始める。
- (4) 自分の「得意」が増える。

○エビデンス(具体的数値など)

(1)に関して

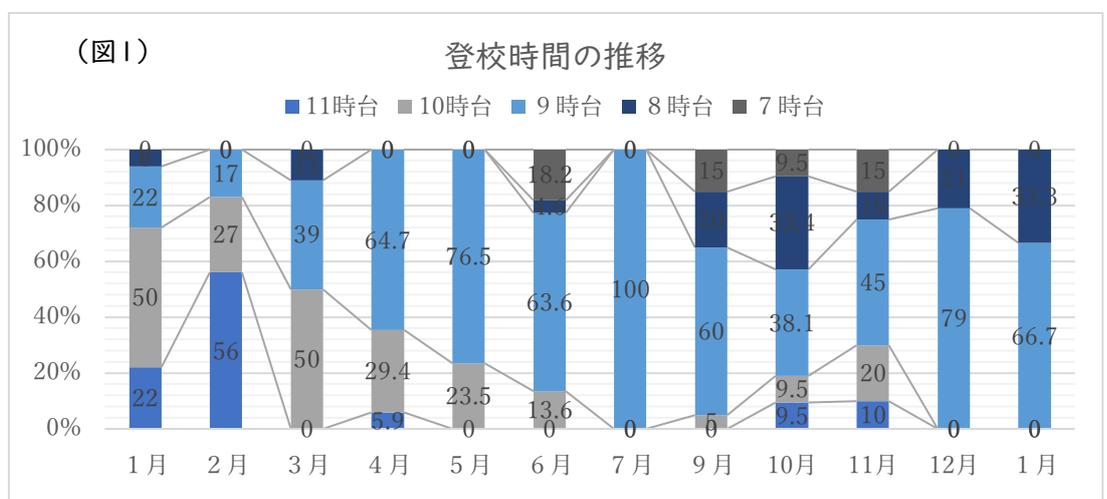
(図1)は昨年度1月から今年度1月までの登校時間の推移である。昨年度2月は8割以上が10時以降の登校だったが、5月終わりからメールのやりとりを始め、登校時間が早まっており、7月には安定して9時台に登校し、1時間目の授業に参加できるようになった。

9月以降、怒りのコントロールができず、再び登校時間が遅くなる時期もあったが、12月になりまた安定が見られ、1月には8時台の登校も増えた。居住地交流会の日のように、自分から目的を持って早く家を出る日が見られるようになっている。

対象生徒の登校時間には、彼の学校生活に対するモチベーションがはっきりと現れると感じている。それが安定している時には、家庭でも落ち着いた様子が見られる。今、家庭でも穏やかに過ごす時間が増えてきており、冬休みも一度も荒れることなく、静かな時間を過ごせた。

不安なことを言語化して伝えられるようになったこと、スカイプやメールでいつでも話ができ、向かう先の状況を見て確認できたことで、見えないものに対する不安が軽減したことが、対象生徒の今の状態につながっていると考える。

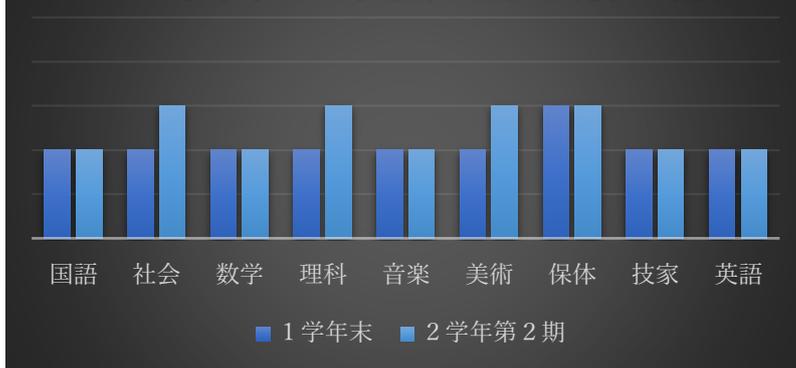
また、iPadを使って、いつでも簡単に人と繋がることができる安心感や、iPadを使って自分の感情の起伏をコントロールできた経験も効果的に作用しているのではないかと考える。



## (2) に関して

(図2)のグラフは1学年末と2学年の第2期の成績の比較である。社会、理科は「AC Flip」や「BitsBoard」を使い、重要語句の暗記に取り組めた成果が現れた。また、今まで落ちて参加することが難しかった美術の授業にも参加できるようになり、作品を完成させることができるようになったため、成績の上昇が見られた。

(図2) 1学年末と2学年第2期の成績の比較



(図3)は冬休み中に自分からテストのため

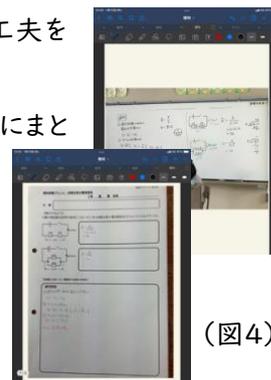


(図3)

の準備のために「AC Flip」に暗記用にノートに貼ったプリントを取り込んで付箋を貼ったものであるが、特に重要だと思うものには付箋の色を変えている。自分流に工夫を加えて使いこなしていることが窺われる。

授業中、学習に向かえない時は、板書やプリントを写真に撮り、一箇所にまとめて保存することが定着した(図4)。

それによって、自分を責めたり、そうだったらどうしようと不安になることもなく、逆に学習に向かえる時間が増えた。仲間に頼んでノートやプリントを借りることができたり、また、学習に交流授業に参加できない仲間に板書やノートを写真に撮ってプリントアウトして渡す姿も見られた。



(図4)

## (3) に関して

(図5)は体育の交流授業に参加し、交流クラスの生徒と一緒にサッカーのドリブルの練習をしている様子である。この時間の直前には、そこに参加することが不安で、行きたくない気持ちをその理由とともに伝えてきた。



(図5)

今までは、その不安を怒りに変えて、逃避して

いたが、誰かに相談し、気持ちの分析を行なっていくうちに、自分が本当はどうしたいのかが、自分でわかってきて、じゃあどうすればできるか、そのためにどうしたらいいかを考え行動できるようになった。

iPad を用いて、自分の気持ちの分析を行ったり、怒りをコントロールするために、気持ちの伝え方を工夫したりしてきたが、そのような取組の中で、荒れずに解決できた経験が増え、相談して自分の気持ちを伝えるだけで、不安を解消できたり、怒りを抑制して次の活動に向かえるようになってきた。

## (4) に関して

(図6)は、特別支援学校との居住地交流会の後の対象生徒の感想である。もともと自動車に詳しく、自動車の整備に大変興味を持つ

(図6)

対象生徒であるが、Pepper のプログラミングを自分の仕事として受け持ち、責任を果たしていく中で、「自分はそれができる」「機械が得意」という気持ちを持つようになった。そして、それは自己肯定感にもつながっていると感じる。ICT 機器の操作に不慣れな担任に、「おれがいるから大丈夫」と声をかけ、積極的に機器の接続等を手伝う姿が見られるようになった。



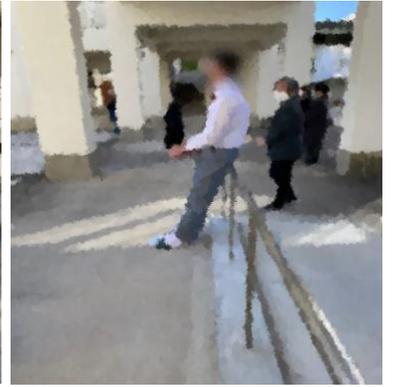
Pepper のプログラミングをしてみても、自分は機械の操作が得意だなと、改めてそう思いました。

家でも、時計を直したり、車のディスプレイを直したり、色々なことに挑戦しています。

## ○その他のエピソード

今年度の取組を通して、iPad が対象生徒の安心のためのアイテムとして定着したと感じている。

右の写真は文化祭当日、中庭で吹奏楽部の演奏を聴いている様子である。対象生徒は集団に入らずにいたが、その場を離れることなく、自分の一番落ち着く場所で聴いていた。手には iPad を持っている。



今年度、生活や学習の場面で iPad を使って取り組んできたことそのものが、不安を感じやすい対象生徒の気持ちの安定につながっていると感じる。何かに向かう時、必ず必要なアイテムとして、いつも iPad を携帯するようになった。交流授業に向かう時、学校行事に向かう時、「これと一緒に頑張ってくる」と iPad を持って教室を出る姿に、頼もしさを感じられるようになった。